

宮沢賢治の求める「ほんたうの幸ひ」への道

赤羽 学
岡山大学文学部

A Way to KENJI MIYAZAWA's "True Happiness"

Manabu AKAHANE

Faculty of Letters, Okayama University

宮沢賢治の童話「銀河鉄道の夜」は、昭和7年（1932）の作である。この頃賢治は、体を壊し、静養を続けながらも、東北砕石工場からの依頼の用をたしたり、肥料設計の相談に応じたりしていた。この作は、母の牛乳を取りに出かけたジョバンニが、途中で水に溺れるザネリを友達のカムパネルラが助け、自分は水死したという話を聞き、そのカムパネルラと銀河鉄道に乗り、「ほんたうの幸ひ」を求めて、色々な体験をする話である。

「七、北十字とプリオンシ海岸」で、カムパネルラは、突然、ジョバンニに、

「おつかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか」

と尋ねる。ジョバンニがだまっていると、再び、

「ぼくは、おつかさんがほんたうに幸ひになるなら、どんなことでもする。けれどもいつたいどんなことが、おつかさんのいちばんの幸ひなんだらう。」

と、切羽つまって言う。ジョバンニが

「きみのおつかさんは、なんにもひどいことないぢやないの。」

と慰めると、カムパネルラは、

「ぼくわからない。けれども、誰だつて、ほんたうにいいことをしたら、いちばん幸ひなんだねえ。だから、おつかさんは、ぼくをゆるして下さると思ふ。」

と、何か本当に決心しているように見えた。このカムパネルラの煩悶は、自己を犠牲にした善行は、確かによいことには違いないが、また別の面に対して罪を作るといふ、その相対的側面に気

づいた結果である。ザネリは助かり、助かった家庭は喜ぶだろう。しかし、カムパネルラを失った家庭は悲しみに沈む。カムパネルラが母への許しを求めるのは、その自己犠牲が産む他への配慮のなさへの反省である。

大正3年(1914)8月に刊行された島地大等編の『漢和対照 妙法蓮華経』に感激した賢治は、急速に法華経信仰の度合が高まり、大正9年(1920)には、家の宗旨、真宗の改宗を求めて父と口論となり、翌10年には、突然上京して、国柱会の布教活動に従事しつつ、「法華文学」を志して、猛烈な創作活動に励む。賢治のこうした猪突猛進的な行動は、当然家庭内にひどい軋轢を引き起した。賢治のみんなの幸福を求める行動は、それ自体尊いものであったに違いないが、彼の無断上京は、両親殊に母を悲しませたことは想像にかたくない。自己を犠牲にして他を救うという賢治の信念にぐらつきを見せるのは、この母への配慮があったからに外ならない。カムパネルラが、自分の行為を自認しつつも母への許しを求めるのは、賢治の心の投影である。

一人が犠牲になることにより、地域全体を救うという崇高な理念は、童話「グスコブドリの伝記」によって達成された。これは、「銀河鉄道の夜」と同じ昭和7年3月の『児童文学』第2冊に発表したものである。ブドリの一家は、両親とブドリと妹のネリの4人で、森の中で木を伐って暮していた。ある時期饑饉が連続してこの地域を襲い、食料がなくなったブドリ一家は、子供にわずかな食物を残して、両親は蒸発してしまう。これは、やや不自然な結構であるが、饑饉が起ると、東北の農村では、子供を売るといふしきたりが横行するのに対する反撥であろう。残された二人は、その食物で命をつないでいるうちに、ネリは人さらいにさらわれ、孤独になったブドリは、テグス工場で手伝わされたり、オリザ栽培に使役されたりしながら、大博士クーポーに弟子入りして土質学を学び、火山局に勤める。イーハトーヴ火山局では、火山の噴火を人工的に支配し、噴火を未然に防いだり、空中から肥料を撒布すること始め、その方面でのブドリのアイデアが評価され、彼は一躍有名になる。ブドリはある一部の者から誤解され、乱暴されたことが新聞に出て、行方不明であったネリとの再会が果される。ある年夏に暑さが訪れず、凶作が必至となったことに対し、火山局では、火山を人工的に爆発させ、炭酸ガスを大気中に充満させ、地球の温暖化をはかり、作物を救うという計画をたてる。しかし、この計画を実行するためには、最後の一人だけが帰れないという切羽つまった状況に迫られた。ブドリは最後の一人になることを志願し、また63歳になる上司ベンネン技師もそれを希望したが、結局ブドリ一人が残り、この計画を実行し、地域全体を饑饉から救う。

この話は、確かに最少限の犠牲により、最大限の幸福を勝ち得た点で、賢治の求める「ほんたうの幸ひ」を実現したものと言えるであろう。しかし、用心深く、賢治は、ブドリに家族を与えていない。妹がいたが、これは全く関係ない存在であった。もし家族がいたらカムパネルラの場

合と同様に、ブドリとても躊躇したことであろう。あるいはそれを振り切ったとしても、ブドリの胸には、心を痛める何物かが残ったことであろう。かように、自己犠牲は、尊い行為には違いないが、絶対に、全部の人々を幸いに導く行為とはいえない。

このブドリの死は、世間からどのように評価されたであろうか。それについては書かれていないが、恐らく英雄視されたことであろう。しかし、自己を滅して英雄となる結果を、賢治は決して望まなかった。溺れたものを助け、幸い自分も助かり、王様から褒美に珠を賜わるが、本人が慢心して、他を馬鹿にする態度に出たために、珠が割れ、めくらになってしまうという話が「貝の火」である。川のほとりで遊んでいた子兎のホモイは、川上から流されてきた雲雀の雛をやっとのことで助ける。お礼に来た母子の雲雀から、鳥の王様の引出物として「貝の火」という宝珠をあずかる。これは所持者が不実をすると、曇ってしまうという不思議な珠で、これを一生満足に持っていることができたのは、鳥に二人、魚に一人あっただけだという話である。ホモイは気軽に珠を曇らすようなことはしないと約束するが、外に出ると早速大将になり、栗鼠や狐やもぐらを手下に大変威張る。ホモイは栗鼠に鈴蘭の実を沢山取るように命ずる。それを知った父は、珠はきっと曇ってしまっていると不安に思うが、まだ珠の火は燃えている。翌日ホモイは、狐から大変うまい角パンを恵まれる。ホモイはこれを父母に渡して親孝行しようとするが、これが狐の盗品であることがばれ、父はもう珠は曇ってしまったと嘆くが、幸い珠は元通りである。次の日ホモイは狐にそそのかされ、もぐらをおどかす。またも父が心配して珠をみるが、珠の火はまだ燃え続ける。その次の日ホモイは、昆虫や鳥を捕えて動物園を作ろうとする狐の誘いに乗り、狐の捕えた動物を助けようとしめない。その日に珠はとうとうかすかな曇りを生じた。それはふいてもとれず、次の朝鉛のように曇ってしまった。驚いたホモイは、父の助けを得て、狐と決闘して動物を逃がすが、時既におそく、珠は割れ、その粉が目に入ってホモイは盲目になってしまった。これは人命救助の善行が、その後の無反省な行動のために、逆に不幸になった話である。このように、賢治にとっての善行は、人に褒められるためではなく、黙って実行すればいいものであった。

ここに至って我々は、昭和6年(1931)11月、誰にも示さず手帳に書きつけてあった、「雨ニモマケズ」の詩に思い至るであろう。

雨ニモマケズ

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

丈夫ナカラダヲモチ

慾ハナク
決シテ瞋ラス
イツモシヅカニワラツテキル
一日ニ玄米四合ト
味噌ト少シノ野菜ヲタベ
アラユルコトヲ
ジブンヲカンジョウニ入レズニ
ヨクミキキシワカリ
ソシテワスレズ
野原ノ松ノ林ノ蔭ノ
小サナ萱ブキノ小屋ニキテ
東ニ病氣ノコドモアレバ
行ッテ看病シテヤリ
西ニツカレタ母アレバ
行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ
南ニ死ニサウナ人アレバ
行ツテコハガラナクテモイイトイヒ
北ニケンクワヤソシヨウガアレバ
ツマラナイカラヤメロトイヒ
ヒデリノトキハナミダヲナガシ
サムサノナツハオロオロアルキ
ミンナニデクノボートヨバレ
ホメラレモセズ
クニモサレズ
サウイフモノニ
ワタシハナリタイ

「貝の火」はなまじ褒められたために、不幸を招いた例である。

二

「雨ニモマケズ」の詩の最後にまとめられた賢治の希求した理想的な人間像「ミンナニデクノボートヨバレ／ホメラレモセズ／クニモサレ」ない人間の姿は、「虔十公園林」に開陳された。この作の成立年は未詳であるが、「雨ニモマケズ」の詩の成る少し前ぐらいだったのではあるま

いか。それは、両者の言葉がよく似ているからである。「度十公園林」の冒頭は、

度十はいつも縄の帯をしめてわらつて杜の中や畑の間をゆつくりあるいてゐるのでした。

と始まる。これが「雨ニモマケズ」の「イツモシヅカニワラツテキル」に符合する。この度十は、馬鹿か利口かわからず、「雨の中の青い藪を見てはよろこんで目をパチパチさせ、青ぞらをどこまでも翔けて行く鷹を見付けてははねあがつて手をたたく」ような男であった。その度十がある時親に杉苗700本を買ってくれと言う。それは、杉苗は育たぬと言われる裏の野原へ植えるためであった。まわりの者は皆わらったが、7、8年もたつと、丈が九尺ぐらいになった。枝打ちをされ、並木のようになった杉林に子供が集まって遊ぶ。

度十もよろこんで、杉のこつちにかくれながら、口を大きくあいてはあはあ笑ひました。と、ここにも度十の「笑ひ」が見られる。隣に畠を持つ平二は、畠が日陰になるから伐れと要求するが度十は応じない。平二が暴力を振ると、抵抗しないので平二もその場を去る。その年腸チブスかはやって平二も度十も死ぬ。その後町は発展したが、度十の植えた杉は一丈ぐらいになり、伐られずに子供達に恰好の遊び場所を提供した。度十の死後20年程たって、村出身のアメリカの大学の教授になっている博士が帰郷し、この度十の杉を見て、次のように提案する。

「ああさうさう、ありました、ありました。その度十といふ人は少し足りないと思つてゐたのです。いつでもはあはあ笑つてゐる人でした。毎日丁度のこの辺に立つて私らの遊ぶのを見てゐたのです。この杉もみんなその人が植ゑたださうです。ああ全くたれがかしこくたれが賢くないかはわかりません。ただどこまでも十力の作用は不思議です。ここはもういつまでも子供たちの美しい公園地です。どうぞ、ここに度十公園林と名をつけて、いつまでもこの通り保存するやうにしては。」

こうして、度十林は、人々に無限の恩恵をもたらす。これが本当の幸いであることを賢治は、

全く全くこの公園林の杉の黒い立派な緑、さはやかな匂、夏のすずしい陰、月光色の芝生が、これから何千人の人たちに本当のさいはひが何だかを教へるか數へられませんでした。

と結論する。前の引用に見える「十力の作用」とは、仏の神通不可思議の力をいう。

愚者を最高とする思想は「どんぐりと山猫」にも見られる。これは大正10年（1921）9月の上京した折の創作である。おかしなはがきが、ある土曜日の夕方、一郎の家に届く。

かねた一郎さま 9月19日

あなたは、ごきげんよろしいほで、けつこです。あした、めんどなさいばんしますから、おいでなさい。とびどぐもたないでくなさい。山ねこ 拝

一郎は、途中、栗の木や笛吹きの籠やりすに道を尋ね尋ねしてゆくと、山猫がどんぐりを相手に裁判をしている。訴訟は、どういう形のどんぐりが最上かということである。先のとがっている

もの、丸いもの、大きいもの、背の高いものがそれぞれ最上だと主張する。それが3月も続き、和解を勧めてもきかない。そこで一郎は、

このなかで、いちばんえらくなくて、ばかで、めちやくちやで、てんでなつてゐなくて、あたまのつぶれたやうなやつがいちばんえらいのだ。

と申し渡す。こうした評価は、貪欲でこすからしい物持ちに対する反撥である。

山奥の素朴で正直で融通のきかない人間に対する賢治の同情は人一倍強い。「祭の晩」では、たまたま里へ出て来た山男が、祭に出逢い、「空気獣」といういかがわしい見世物に10銭もの木戸銭を取られ、団子を一串無銭飲食したために、袋敲きに逢おうとする。亮二がそのお金を立替えて、そのお礼に山のような薪を貰う。こうした世間ずれのしない人間に賢治は満腔の同情を注ぐ。つまらない訴訟を止めさせ、「デクノボー」と呼ばれると人物して賢治は一生を送りたかったのである。

三

銀河鉄道の車中で、ジョバンニとカムパネルラは、不思議な鳥捕りに逢う。彼らは天の川で上手に鷺を捕る。この人達をジョバンニは、たまらなく気の毒に思う。

鷺をつかまへて、せいせいしたとよろこんだり、白いきれでそれをくるくる包んだり、ひとの切符をびつくりしたやうに横目で見て、あわててほめだしたり、そんなことを一々考へてみると、もうその見ず知らずの鳥捕りのために、ジョバンニの持つてゐるものでも、食べるものでも、なんでもやつてしまひたい、もうこの人のほんたうの幸になるなら、自分があの光る天の川の河原に立つて、百年つづけて立つて鳥をとつてやつてもいいといふやうな気がして、どうしてももう黙つてゐられなくなりました。

この他人に対する献身は、「西ニツカレタ母アレバ／行ツテソノ稲ノ東ヲ負ヒ」という手助けの精神と繋る。

「オツベルと象」は、オツベルの農場へたまたま一頭の象が現れ、初めはオツベルの指示通りに働き、オツベルも重宝がって優遇するが、次第にオツベルはけちになり、最後は物も碌に食わせずに働かすので、象は仲間に手紙を出し、象の大群がオツベルをやっつけるという話である。白象は、

あゝ、稼ぐのは愉快だねえ、さつぱりするねえ。

といい、何の要求もせずにひたすら働く。オツベルはこうした白象の献身に対し、これに悪意をもって応ずる。賢治の献身についても、これを仇で返すような人が多かったのではあるまいか。

「グスコブドリの伝記」のブドリも、初めに働かされた「てぐす工場」で、殆ど手当てもなしに働かされ、仕事が一段落すると、

おい、お前の来春^{らいはる}まで食ふくらゐのものは家の中に置いてやるからな。それまでここで森と工場の番をしてゐるんだぞ。

と言い渡されて、置き去りにされる。ブドリは、その工場に残された、てぐすの図や機械の図や、その他さまざまな本を見て、知識を涵養する。翌春、戻ってきた工場主に再度働かされるが、噴火のために森は全滅し、てぐす飼いの男達は、ブドリをほったらかして行ってしまう。このように、当時の東北地方では、労働力に対し、正当な賃金を払わなかった実態が賢治の手によって暴露される。賢治は、絶えず裏切られながら、尚かつ献身の努力を怠らなかったのである。

四

銀河鉄道のジョバンニとカムパネルラの旅は孤独である。たまたま乗り合わせた人々も、皆途中で下車してしまう。これは賢治の法華信仰の道が決して平坦ではなく、同行者・共鳴者の少なかったことを意味しているだろう。銀河鉄道に、鳥捕りの人と交替に、背の高い青年が女の子と男の子の姉弟を連れて乗り込んでくる。彼らは、氷山にぶつかって沈んだ船の遭難者で、天上の神様の許に赴く途中である。この氷山にぶつかって沈んだ船とは、恐らく1912年4月1日深更、北大西洋ニューフェンドランド沖合で氷山と衝突して沈んだイギリスの商船タイタニック号で、乗組員全員2208人のうち、1517人が犠牲者となった。この年は明治45年に当り、賢治は16歳になっていて、この事件は異常な衝撃を彼に与えたものと思われる。青年は、二人の子供を慰めて次のように言う。

わたしたちはもう、なんにもかなしいことはないのです。わたしたちはこんないいところを旅して、ちき神さまのそこへ行きます。そこならもう、ほんたうに明るくて匂がよくて立派な人たちがいっぱいです。そしてわたしたちの代りに、ポートへ乗れた人たちは、きつとみんなに助けられて、心配して待つてゐるめいめいのお父さんや、お母さんや、自分のお家へやら行くのです。さあ、もうちぎですから、元気を出しておもしろくうたつて行きませう。

この船は、衝突のショックで左舷のポートを駄目にし、従って救命ポートには乗客の半分も乗れなかった。この時の混乱は想像に余りある。この時の心境を青年は次のように語る。

近くの人たちはすぐみちを開いて、そして子供たちのために祈つて呉れました。けれどもそこからポートまでのところには、まだまだ小さな子どもたちや親たちやなんか居て、とても押しのける勇気がなかつたのです。それでも、わたくしはどうしても、この方たちをお助けするのが、私の義務だと思ひましたから、前にゐる子供らを押しのけようと思いました。けれどもまた、そんなにして助けてあげるよりはこのまま神の御前にみんなで行く方が、ほんたうにこの方たちの幸福だと思ひました。それから、またその神にそむく罪はわたくしひとりです。ぜひとも助けてあげようと思ひました。けれども、どうしても見てみると、

それができないのでした。

ここには、自己犠牲によっても救い得ない悲しい運命が語られる。神に背く利己的な行為の罪を背負う積りになっても、どうしてもそれが出来ない。人生とは得てしてこうしたもののである。この救いのない人生をどう考えたらよいか。このことを燈台守が慰めて言う。

なにがしあはせかわからないです。ほんたうにどんなつらいことでもそれがただしいみちを進む中でのできごとなら、峠の上りも下りも、みんなほんたうの幸福に近づく一あしづつですから。

我々はどんなに辛く悲しいことがあっても、正しい道を進まなければならない。これが賢治の信念である。

幼い姉弟を連れた青年の心は、まさに賢治と同じ心であった。であるが故に、銀河鉄道に乗るジョバンニとカムパネルラに、この人々が同車したのである。しかし、この人々も別れてゆく。彼らはサウザンクロスサウザンクロスの駅で降りる。この「クロス」駅で下車したことによって知られるように、この青年はキリスト教徒であった。いざ降りる段になって、男の子は下車を拒む。ジョバンニも同行することを勧めるが、青年は、神様の性格を、

ぼくほんたうはよく知りません。けれどもそんなでなしに、ほんたうのたった一人の神さまでです。

と説明する。たった一人の神を奉ずるのはキリスト教である。このキリスト教の博愛と、万人の本当の幸福を求める賢治の考えとは共通するところがある。キリスト教においては、人々は最後の審判の場で個人個人の善悪がさばかれ、善人は祝福を、悪人は懲罰を受ける。賢治の場合は、この世の存在はすべて仲間で、善も悪もないのである。「カイロ団長」において、殿様蛙は、30匹の雨蛙を騙して酒を飲ませ、その酒代さかしろに、それらを不当に酷使するが、最後に、

すべてあらゆるいきものは、みんな気のいい、かはいさうなものである。けつして憎んではならん。

との王様の命令が出て、殿様蛙も反省する。賢治は、個人よりも全体を重んじる。

このことは、賢治の愛についての考えを見ればいっそうはっきりする。大正11年11月27日、妹トシを失う。トシは賢治にとって唯一の理解者ともいうべき存在で、賢治はその死を悼み、「永訣の朝」という絶唱を作った。しかし、賢治は、翌12年7月から8月にかけて樺太を旅行した際、青森で「青森挽歌」を作り、改めてトシをとぶらった。その最後は、

《みんなむかしからのきやうだいなのだからけつしてひとりのをいのつてはいけない》

ああ わたくしはけつしてさうしませんでした

あいつがなくななくなつてからあとのよるひる

わたくしはただの一どたりと
あいつだけがいいところに行けばいいと
さういのりはしなかつたとおもひます

と結ばれる。これによっても、賢治においては、全体の救済が個人の救済に優先していたことが知られる。要するに、キリスト教においては、全体よりも個人が優先し、賢治においては、個人よりも全体が優先するというように、その救済観に相違があったといえるのではあるまいか。

五

「銀河鉄道の夜」の発端は、ジョバンニの母に飲ませる牛乳が届かなかったために、彼がその牛乳を取りに行くということである。牛乳屋は、牛乳を届けることのできなかつた理由を、次のように弁明する。

ほんたうに済みませんでした。今日はひるすぎ、うつかりしてこうしの柵をあけて置いたも
んですから、大将早速親牛のところへ行つて、半分ばかり吞んでしまひましてね……。

このことは、我々が吞む牛乳は本来子牛のものであり、子牛の飲んだ余りを人間が飲むのであれば許されるということを暗示する。しかし、子牛に飲ませず、人間が飲んでしまえば、これは略奪である。そこから人間が生きるために、他の動物を殺して食べたり、或は本来動物のものであるべきものを、人間が取り上げたりすることの是非が問題となる。「なめとこ山の熊」の小十郎は、本来熊が好きであるが、それ以外に生業がないために、止むを得ず、熊を取っている。そして取った熊も町の貪欲な商人に買い叩かれ、卑屈な毎日を送る。そうしたある日、一頭の大熊を殺そうとすると、熊は、

もう二年ばかり待つて呉れ。おれも死ぬのはもうかまはないやうなもんだけれども、少しし
残した仕事もあるしただ二年だけ待つてくれ。二年目にはおれもお前の家の前でちやんと死
んでゐてやるから。毛皮も臍袋もやつてしまふから。

と言い残して去る。そして約束通り二年後に小十郎の家の前で死ぬ。その後、小十郎は別の大熊に殺されるが、熊は、

おお小十郎、お前を殺すつもりはなかつた。

と小十郎に詫げる。小十郎の死骸は、雪に埋まり、月に照らされ、その顔は、

まるで生きてるときのやうに冴え冴えして何か笑つてゐるやうにさへ見えたのだ。

と記される。この死体の笑いは、小十郎は死んで満足であつたという思いを伝える。「雨ニモマケズ」の、いつも静かに笑っているでくのぼうを思わせる笑いを残して、小十郎は死んだ。

小十郎と熊との交流は、両者はお互いに友達同士だということを示すものである。動物は、他の生物によって生かされている。その場合、一方的に他を食べるだけではなく、他が自分を必要

とする時は、自分の体を他に捧げる覚悟が必要である。そうしないと自然の食物連鎖の輪が切られて、生物全体の破滅となる。「銀河鉄道の夜」に現れる蝸は、小さな虫を食べて生きていたが、いたちに見つかって食べられようとして必死で逃げ、井戸に落ちて溺れ死のうとする時、次のように祈る。

ああ、わたしはいままでいくつのものの命をとつたかわからない、そしてその私がこんどい
たちにとられようとしたときは、あんなに一生懸命にげた。それでもとうとうこんなになつ
てしまった。ああなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだを、だまつて
いたちと呉れてやらなかつたらう。そしたらいたちも一日生きのびたらうに。どうか神さま
私の心をごらん下さい。こんなにむなしく命をすてず、どうかこの次には、まことのみんな
の幸のために私のからだをおつかひ下さい。

この蝸の反省は、地球上のすべての生き物の命を尊重した平等の見解である。また「よだかの星」
のよだかは、すべての鳥から軽蔑され、遠くに去る途中に、幾つかの虫を食べる。そこでよだか
は、

ああ、かぶとむしや、たくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのただ一つの僕が、
こんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。ああ、つらい、つらい。僕はもう虫を
たべないで饑えて死なう。いやその前にもう鷹が僕を殺すだらう。いや、その前に、僕は遠
くの遠くの空の向うに行つてしまはう。

と考える。そして、この地上を去る時弟の川せみに、

それはね。どうも仕方ないのだ。もう今日は何も云はないで呉れ。そしてお前もね、どうし
てもとらなければならぬ時のほかは、いたづらにお魚を取つたりしないやうにして呉れ。
ね、さよなら。

と言い残す。この蝸やよだかの言葉をまじめに考えないと、今の地球上の食物は全部人間に独占
され、その結果として、人間も滅亡するのではあるまいか。